

好きを 仕事に変える

沖中幸太郎

OKINAKA, Kotaro

はじめに

本書は、アルファポリスビジネスで連載中のインタビュー企画「道を極める」を1冊にまとめたインタビュー集です。好き^々を仕事に変えて生きている人たちは、どうやってその道に辿り着いたのか。

その答えにはきつと多くの「人生のヒント」が詰まっているのではないかと考え、本企画はスタートしました。

私も「インタビューアー」という、一般的ではないちょっと変わった仕事を生業としています。

今でこそこうしたお仕事をいただけるまでになりましたが、その道のりは決して平坦なものではなく、インタビュー相手の心の内にある本音を聞き出せなかったり、せつかくうかがった素晴らしいお話をうまく原稿にすることができなかったりと、失敗や挫折をしてきた経験がたくさんありました。

本書に登場していただいた12人の方々は、皆それぞれの道で、唯一無二の活躍

を続ける方ばかりです。そして、全員に共通しているのは「好き」を仕事に変えた人であるということです。

自分が理想とするコーヒー豆を求めて世界中を飛び回るコーヒーハンター、ゼロからハリウッドに飛び込んだ特殊メイクアップアーティスト、市場がない中で仲間をつくることから始めた靴職人、大学卒業後に師匠に志願し独自のスタイルであったという間に真打へと昇進した落語家など……。

「好き」という気持ちを貫き、そこに立ちはだかる困難を克服し、自分だけの生き方を極めていく方ばかりです。

道の極め方に正解はありません。それぞれの方が唯一無二の方法で道を開拓し、結果として「好き」を働く原動力に変えることで、自分だけの道を進まれています。

「やりたいことを極めれば、やるべきことが見えてくる」

そのドラマのどれ一つとっても、「同じ話」はありません。ご紹介する方たち全員が困難に向き合ってきた方法は、当然ながらさまざまです。しかし、本当に好きであるが故に、皆さんは自らの手で困難を克服する方法を見出してきたのです。

人生を後悔なく生きるためには、一体どうすればいいのか。それを実証してきた12人のエピソードを通して、私自身とても大きな道標を得られたように実感しています。

そして、この12人の情熱が読者の皆さまにも伝わり、「新たな道」へと漕ぎ出す勇氣に、または「自分の道」を貫く熱意になってくれたのなら、これほど光栄なことはありません。

人生という道を決めるのは、他の誰でもない、自分自身なのです。

平成29年7月 沖中幸太郎

01	川島良彰／コーヒーハンター	8
	世界を飛び回るコーヒーハンターの豆一粒への愛情とこだわり	

02	坂口 慶／絵本の読み聞かせ屋	26
	夜の路上で始まった絵本の読み聞かせ「聞かせ屋。けいたろう」という生き方	

03	江川悦子／特殊メイクアップアーティスト	50
	特殊メイクのパイオニアとして活躍し続けてきた、試行錯誤と挑戦	

04	春風亭一之輔／落語家	70
	“好き”を極める中で見出した独自の「ハマり力」と「やわらかい軸」	

05	山口千尋／靴職人	92
	やりたいことを極めていけば、本当に「やるべきこと」が見えてくる	

06	内山愛子／調香師	114
	日本中に香りと幸せを広げる「魔法のしずく」を生む調香師	

07	佐藤直紀／作曲家	136
	『ALWAYS 三丁目の夕日』や『龍馬伝』、超人気作曲家が大切にしていること	

08	パトリック・ユウ／スタジオMDJ	158
	スポーツを愛するDJが作り出す熱気に満ちた空間	

09	多良良泉己／パン・ケーキ職人	176
	競輪レースの重大事故から奇跡の復活。“天使のパン・ケーキ”職人の生きざま	

10	藤倉健雄／パントマイミスト	196
	沈黙を破ったパントマイムが魅せる、「好き」をやり遂げる道とその姿	

11	矢部澄翔／書家	218
	「続ける才能」で実現した書家の道。世界に発信する「書」の“感動力”	

12	遠藤弘満／国産腕時計メーカー	234
	「Made in JAPAN」にこだわるオリジナル腕時計ブランドの系譜	

01 川島良彰

コーヒーハンター

「コ ーヒーのためにできることはすべてやる」——。世界中から厳選されたコーヒー豆を使って特別な一杯を届ける、株式会社ミカフェート代表の川島良彰さん。世界中の農園を歩き、まだ見ぬ豆を求め世界を飛び回るコーヒーハンターになるまで、ずっと心にあったのは、幼い頃からのコーヒーの世界への憧れ。そして、それを実現するために持ち続けていたのは、「誰にも負けない行動力」でした。

Profile

かわしま・よしあき／コーヒーハンター
エル・サルバドル共和国ホセ・シメオン・カニャス大学、
同国立コーヒー研究所を経て、国内コーヒーメーカーで、
世界各地のコーヒー農園の開発に携わる。2008年、ミカ
フェートを設立。海外のコーヒー農園を年間130日以上
渡り歩く、コーヒーハンターとして活動している



世界を飛び回るコーヒーハンターの
豆一粒への愛情とこだわり

やりたいことをやるための努力は厭^{いと}わない コーヒー農園で働くために書いた ブラジル大使館への手紙

川島氏…私は、コーヒー焙煎卸業者の息子として、静岡で生まれました。

協調性のない子どもで、勝手気ままに好きなことをやっていた記憶があります。

そのくせ内弁慶で人見知りが激しく、幼稚園も退園させられるほどでしたね（笑）。

小学生になると、班活動でも好き勝手にしていたので、担任の先生から「川島君は一人で班をつくりなさい」と言われて、私もめげずに一人で点呼するなど、班活動^どしていました（笑）。

合唱のときも歌が下手だからと、声を出すのを禁止されたりして、まさに暗黒時代でした。今、カラオケで歌えないのもそのせいです（笑）。

——それは、うんざりしていますね。

最新の焙煎器、独自の仕組みと技術、コーヒー豆一粒に至るまでの妥協なき姿勢で、最高の一杯、はつくられていく



川島氏…もう学校生活もうんざりしてしまつたので、身近だった憧れの世界「ブラジルのコーヒー農園で働きたい」と、ブラジル大使館に手紙を出しました。

一度目は返事が来ず、すぐに二度目の手紙を送ったら、「日本政府に相談してください」と返ってきました（笑）。親に内緒でしたから、見つかったときは大目玉を喰らいましたよ。

何かをやりたいと思ったら絶対に諦めたくない性格で、必要なことはすべてやろうとするんです。最高のコーヒーをつくらうと思ったら、何をすべきか。

「コーヒーのためにできることは、すべてやる」

それは今も同じですね。

カトリック学校の夏休みに、お寺で修行! 和尚さんが後押ししてくれた エルサルバドル行き

川島氏…中学・高校は静岡聖光学院という学校に進みましたが、そこで大きな転機が訪れました。父の幼友達が、沢庵和尚たくあんで知られる名利めいりき、品川の東海寺のご住職だったのですが、「どうせ夏休みは遊んでばかりだろう」と、高校一年生の一学期の終業式の翌日、父に連れられて東京に行ったんです。

そして、その東海寺で修行させられることになったんですよ。

6人の貧乏学生と一緒に寝食を共にしていました。朝5時に起きて、座禅、そのあと掃除、大学生による私への勉強レクチャーという毎日でした。

質素な生活をしていた和尚でしたが、お寺には方々からいただいたお酒がいっぱいあって、ある日、私はそこにあったお酒を調子に乗って飲んでしまったんです。

それが見つかって「飲むことは見逃せても、酔うことは許されない!」と叱責を

受けたのですが、そんな粋な言葉いきに惚れてしまった私は、高校の3年間の夏休み、冬休み、春休みと、ずっとそのお寺に修行に行かせてもらいました。

小学生のときからの「海外のコーヒー農園で働きたい」という夢は、親から「中学を出たら」「高校を出たら」と引き延ばされていきました。でも、いよいよ高校卒業の段階で、父親の仕事で縁のあったエルサルバドルへ行けることになったんです。

実はそのときも、最初は「大学を出たら」と引き延ばされかけていたんです。このとき、和尚が「やりたいようにさせたらいい」と父を説得してくれて……。それもあって、晴れてエルサルバドルへ行くことができました。



「『海外のコーヒー農園で働きたい。という幼い頃の夢を後押ししてくれたのは、お寺の和尚さんでした』

エルサルバドルに行つたけれども……。 留学、勘当、西友アパレル時代

川島氏…ところが、それまで海外には行つたこともなく、飛行機に乗るのも初めてでしたから、搭乗してから不安で涙は出るわ、その状況を見た乗客から心配されるわで……。

でも、現地に到着してひと晩寝たら「こんなに景色が綺麗なところで、これから学ぶことができるんだ」とホームシックから一転、ワクワクしましたね（笑）。

——ラテン系の血が流れていらつしやる（笑）。

川島氏…楽天的なのかもしれません（笑）。現地では、駐日エルサルバドル大使の妹さんのお宅でホームステイをさせてもらい、ホセ・シメオン・カニヤス中米大学に通いました。

「東京の大学に行けば、遊びで身を持ち崩すだろう」という父親の思惑もあつての、

（そうならなかったための）エルサルバドル行きでしたが、ある意味当たってしまったと思います。

現地では、言葉を覚えるために友人をたくさんつくり、週末は夜な夜なパーティーに繰り出していました。

そもそもコーヒーの勉強をするための口実としての留学でしたから、途中から大学の講義にも出席しなくなり、勝手に直談判して入所させてもらったエルサルバドル国立コーヒー研究所で、コーヒー栽培の研究に明け暮れていたんです。

エルサルバドルにはトータル5年いたのですが、実は途中で、親に大学に行っていないことがバレてしまつて……。2年半のカリキュラムが終わる段階で一度、日本に呼び戻されているんです。

——ご両親はカンカンですね（笑）。

川島氏…お金の問題もあり、仕方がないのでいったん日本に帰つたものの、もうすっかり家業を継ぐ気はなくなり、そのうち親とも喧嘩するようになり、ついに勘当されてしまいました。

どうしたものかと職を探していたら、ちょうど津田沼の西友ストアが中途採用を募集していたんです。そこで当面の生活とエルサルバドルへ帰るための渡航費用を稼ごうと、応募しました。

大学も卒業していないしダメ元でしたが、多数の応募者の中かなぜか運よく採用されたのは驚きでしたね。

当時の津田沼は量販店と百貨店の激戦区で、私は期待を背負ってベビー服課女兒服係に配属されました。午後5時から始まるワゴンセールのかげ声も、最初は恥ずかしくて言えませんでしたよ。でも後ろから係長さんに叱咤され、そのうちにいつの間にか独特の声で「いらっしやいませ、いらっしやいませ」と言えるまでになりました（笑）。

その様子を、たまたま心配で見にきていた母と姉に目撃されて……、その場で泣かれましたね。

1日500円で生活して、正月出勤など、お金を貯めるために仕事は一所懸命に頑張っていました。でも昼休みは屋上でコーヒーの本を読んで勉強していましたか

「再びエルサルバドルに渡航すべく、生活費は1日500円と決めて、あとはただひたすらお金を貯めるため、がむしゃらに働いていました」



ら、係長から「なにをやってるんだお前、アパレルのことを勉強しろ」って（笑）。そこには1年半いましたが、そんな、どこか心ここに在らずといった調子でしたから、慰留されることもなく円満に（!）辞めることができました。

リベンジ！ 二度目のエルサルバドル 内戦激化で銃撃され腰を抜かす

川島氏…お金を貯めて渡った二度目のエルサルバドルは、状況がうって変わっていました。内戦による治安の悪化で、留学当初500人ほどいた在留邦人も、その頃は数十人程度が残っているだけでした。

革命が起き内戦がさらに激化していましたが、コーヒーの栽培に関わっていることが楽しくて、自分は研究所に残っていました。

毎日、銃声と爆弾の音が聞こえる中で、だんだんと感覚が麻痺してしまいました。ある日、市内でテロに巻き込まれ武装集団に銃撃され、自分の30cm上を弾がビュンビュン飛んでいったときは、さすがに腰が抜けましたよ。

その後も、研究を続ける傍ら^{かたわ}、内戦の取材に來られた筑紫哲也さんをはじめ、日本から来る報道関係者の通訳のアルバイトをして生活費を稼いでいました。

でも、いよいよ実験区のある街も武装勢力に制圧され、避難のため米国ロサンゼルスに渡ることになりました。

「コーヒーのためにできることはすべてやる」 パンチパーマでジャマイカ人になりきる

川島氏…その後は、ロサンゼルスで当時コーヒーメーカー「UCC上島珈琲」の会

長であった上島忠雄さんとご縁があつて、入社させていただくことになりました。そこから本格的に、世界の農園でコーヒー栽培に携わるようになりました。

生産責任者として、世界各国でUCCの直営農園の開発に携わる傍ら、マダガスカル島では固有種マスカロコフェアの保護と低カフェインコーヒーを開発したり、フランス海外県のレユニオン島では絶滅したとされていたコーヒーの品種「ブルボン・ポワントゥ」の発見とコーヒー産業の復活を手掛けました。

「コーヒーのためにできることはすべてやる」つもりで活動しました。長らく搾取の時代が続いたジャマイカでは、基本、外国人は信用されませんでした。

でも、どうにかして彼らのコミュニティに入るために、「まずは外見から」と、パンチパーマにしたりしていました（笑）。それが功を奏してか、1050エーカー（東京ドーム90個分）の土地に3つの農園をつくることができました。

実はこのときも人生の大きな節目でした。開発担当から現地法人の社長となり、現地の役職者との会食が続き、農園に足を運べない時期が続いていたんです。

見かねた家族からの「初心を忘れたのか」という言葉にハッとさせられました。

それから会社を辞めて、持っているものをすべて売って、マイアミでキャンピングカーを買って中南米を目指し、その旅の途中で気に入った産地があれば、そこで農園を拓いて生活しようと決めたんです。

私の上司であった前述の上島さんからは、慰留という形でハワイ行きを打診されていたのですが、断るつもりでいました。

ところが1988年、20世紀最大と呼ばれたハリケーン・ギルバートがジャマイカを襲い、せつかくつくった農園も全滅し、住んでいた家も吹き飛ばされてしまったんです。

このときばかりは途方に暮れました。家族には避難のため、先にハワイへ行ってもらいました。

ひとりになり決心がついた私は、「もとの素晴らしい農園に戻そう」と、復興に取りかかりました。

マイナスからの出発でしたが、現地のスタッフの協力もあり「とにかくやるしかない」という気持ちで前に進むことができたんです。

もしこのことがなければ、今頃どこかの農園でコーヒー豆を栽培していたかもしれませぬね。

——コーヒーハンターとして独立しようと思われたのは。

川島氏…やはり「コーヒーのためにできることはすべてやる」と考えた結果、畑の選別から栽培・収穫、そして精選加工。さらに輸送、保管、焙煎、包装までを一括して独自の基準で、一切の妥協なく、自らやることで、新しいコーヒーカルチャーを生み出したいと思ったんです。

そうして2008年、独立して現在の『ミカフェート』という会社を立ち上げました。



スペイン語で「私のコーヒーの樹」を意味するミカフェート (Mi Cafeto)。「コーヒーのためにできることはすべて一切の妥協なく、自ら新しいコーヒー文化をミカフェートで生み出したいと思いました」

至高の一杯を届けるために ミカフェートに込められた想い

川島氏…ミカフェート (Mi Cafeto) とは、スペイン語で「私のコーヒーの樹」を意味します。この名前には、お客さま一人ひとりに「私の」思っていただけのコーヒーの樹を、1本でも多く育てようという熱い想いが込められています。

それは、私が探しまわって見つけた、選ばれたコーヒーの果実を育てる特別な農園に立つ、誇り高き1本の樹なのです。

世界中の生産者とコーヒーを愛する人々を結ぶ、至高の一杯を届けたいという想いで、私をはじめスタッフ皆で取り組んでいます。

私はコーヒーを「フルーツである」と言い、またよくワインとも比較します。70年代、私が日本を出た頃は、コーヒー業界が賑わいを見せる一方で、ワイン業界はデザートワインが主流で、レベルも高いものではありませんでした。

ところがその後のワイン業界は、産地、品種などが明確に分けられ、どんどん情

報公開されて今の賑わいがつくられました。

一方のコーヒー業界は、もともとCSR（企業の社会的貢献）がしやすい世界だと思うのですが、それが不十分なままでした。

まだまだ伝えきれないコーヒーの魅力はたくさんあり、私がやるべきこともまだまだたくさんあると思っています。

——川島さんを「まだまだ」と動かし続けるパワーは、どこから湧いてくるのでしょうか。

川島氏…世界中の農園を訪ねていますが、行くたびに新たな発見があります。

今度ブラジルに行くのですが、その農園主から以前、「初めて日本人が来た」と言われました。ブラジルにおいてさえ、まだまだ知られていない場所があるのかとショックを受けました。

こうした終わらない発見が、私の好奇心を刺激し続けてくれているのだと思います。もっとコーヒーを知りたいという欲求が私を動かしていますが、「まだまだ」全然満足していません。

「魚の獲り方よりも、さらに捌き方を」 コーヒーを通じて伝える真の国際協力

川島氏…栽培技師という職業上の技術だけでなく、私より上の人はたくさんいます。では私の強みは何か。それは、さまざまな生産国の技術や品質、品種を知っていることです。

そして、生産国と消費国を知っていること。一般的に栽培技師は、自国のコーヒーしか知らないし、市場が何を求めているのか、今後どんなコーヒーが求められるようになるのか知りません。

生産国と消費国の架け橋となる。「適切に」繋げていくのが、私の役割であり、今の使命だと思っています。

そして、生産国と消費国の適切な関係でいうと「サステイナブルコーヒー（持続可能性に配慮し、現在だけではなく未来も考え、自然環境や人々の生活をよい状態に保つことを目指して生産・流通するコーヒーの総称）」の問題があります。

世界中のコーヒーの樹、畑、生産者に出会う旅を続けながら、皆さんに特別な一杯と、私なりの世界に対するメッセージをお届けしたいと思います



サステイナブルコーヒーとひと口に言っても、「貧しい人から買ってあげましょう」というのは、貧しいままでいるという前提があり、適切ではないと考えます。

よく「魚をあげるより、獲り方を」と言いますが、そこに「捌き方を」伝えることで付加価値が生まれ、売ることができる。それが貧しさから脱却できる真の国際協力です。

これからも、私に出会ったのを待っているコーヒーの樹と、畑と、生産者が世界のどこかにいると信じて、それを見つけた旅を続けます。その活動を通して皆さんに特別な一杯と、私なりの世界に対するメッセージも一緒に発信していきたいと思っています。

02 坂口 慶

絵本の読み聞かせ屋

全国 各地で絵本の読み聞かせをする坂口慶さん。自身も絵本作家として活躍する坂口さんが、絵本を通して人と人をつなぐようになったのは、今から10年前。夜の路上から始まった絵本の読み聞かせ「聞かせ屋。けいたろう」。この前例のない生き方に辿り着くまで、自らの進むべき道を模索するなかで見つけたのは「目の前の喜びを大切にすること」にほかなりませんでした。

Profile

さかぐち・けい／聞かせ屋。けいたろう
短大の保育学科を卒業後、夜の路上で大人に絵本を読み聞かせる「聞かせ屋。けいたろう」の活動を開始。読み聞かせ、絵本講座、保育者研修会と、10年以上にわたり日本全国を駆け巡る。絵本を通じたエンターテイナーとして、幅広くその魅力を伝え続けている

夜の路上で始まった絵本の読み聞かせ
「聞かせ屋。けいたろう」という生き方

歌手、イラストレーター、お笑い芸人、正義のヒーロー!? お調子者が見た「人を楽しませる」夢

坂口氏…僕は東京の出身で、練馬区の豊島園遊園地のすぐそばに住んでいました。幼稚園には年長の1年しか通っておらず、それまではたつぷりと父と母に遊んでもらって育ったんです。

母によると活発すぎて親を困らせる子どもだったそうですが、一方で絵を描くのも好きで、じっと集中して「いつかこうなりたい」と、幼児向け雑誌に登場するヒーローを模写していました。

当時は漫画の『名探偵コナン』や『幽遊白書』をよく真似て描いていました。そんな風にイラストレーターに憧れる一方で、目立ちやがり屋だったので、「とんねるず」のようなお笑い芸人になりたいと思ってみたり、やりたいことが山積みでした。



歌手、イラストレーター、お笑い芸人、果ては正義のヒーロー……。とにかく「人を楽しませること」に憧れていました

——どれも、人を楽しませる仕事ですね。

坂口氏…お調子者だったんです。自分の行動で人が笑ってくれることが快感でした。中学生になってからは、「LUNA SEA」や「L'Arc-en-Ciel」などのバンド音楽にハマり、そのまま高校では、軽音楽部に入って、自分もボーカルでバンドを組んで活動していました。

この頃の将来の夢は、「歌手になる」とはつきりしていて、毎日部室に込もって練習していましたね。

都立の進学校だったので、周囲は大学に進学する生徒が大半を占めていましたが、自分にはなんとなくためらいがありました。

今思えば青臭かったのかもしれませんが、大学に行くと、あとはもう就職しかないと思っていて、そのまま大人が決めたレールに乗せられそうで怖かったんです。

就職よりも「歌手になること」を優先した結果、大学には進学せず、親に頼み込んで新宿にあるミュージックスクールに2年間通うことになりました。

本当は「バンドを組んで歌手として全国デビュー」と華々しい夢を思い描いていましたが、なれなかったときに恥ずかしいので、「音楽を仕事にしたい」と、おおよっぱにボヤかしたりもしていましたけどね（笑）。

「歌手なんて勘違いだった」

プライドと現実のはざまの苦しみから救ってくれた母の言葉

坂口氏…音楽を始めたのも人より遅く、何か楽器ができるわけでもないし、声域も限られていたので、「とにかく人一倍練習しなければ」と、意気込んでいました。

憧れた歌手のような高い音域で声が出せるようにボイストレーニングに励み、音

楽理論もイチから勉強し直しました。

入学してから毎日、1日中練習室に込もっていましたね。「やればなんとかなるだろう」という、自信だけはあったんです。

ところが、やればやるほど見えてきたのは、華々しい未来ではなく「音程も取れない、思うように声も出ない」という現実。

自分の力の限界でした。誰に言われずとも、自分はプロにはなれないと悟りました。

「自分は何を勘違いしていたんだろう」って、唯一の取り柄だった自信も崩れかけていましたね。

大学に進学して将来に向かって着実に勉強しているまわりの友人とのギャップに悩み、



歌手なんて勘違いだったんです。力の限界を感じ、誰に言われずともプロになれないことはすぐに分かりましたね

あれほど好きで懂れていた音楽番組は、見るのも嫌になるほどでした。

目の前にある「挫折」という現状から逃げ出したい一心でしたが、自分から頼み込んで学費を出してもらっていた手前、なかなか親には切り出せず、いよいよつらさの限界に来たところで、ようやく母に泣きつきました。

——はじめての、そして早すぎる挫折にお母様はどんな反応だったんでしょうか。

坂口氏…それが、母からはひと言だけ、「いいわよ」って。

こちらとしては、「高い学費を払ってもらったからには、絶対に仕事につなげなければ」と意気込んでいたので、どうしてそんなに簡単に許してくれるのかを問うと、「なれると思っていなかったわよ。やりたいって言うからやらせたけど」と、あっさりと言われました（笑）。

その言葉は拍子抜けするほどで、そうだったのかと苦笑いをしながらも、母なりの優しさを感じ涙しました。

子どもと夢中で遊ぶヒーロー!? 一所懸命やりきった先に見えた「保育」との出会い

坂口氏…歌手を目指してからたった半年での挫折でしたが、母に悩みを打ち明けたことで肩の荷が降り、それからは開き直ることができました。

ただ、友人たちから「音楽辞めたんでしょ」と言われたくなかったので、個人レッスンに切り替えたんだと言い訳し、体裁を取り繕っていました。

それぞれ着実に自分の道を進んでいるように見えた友人たちの姿が、僕には眩しすぎたんです。

そういうわけで、逃げ道をつくったものの、現状は何も変わっていないことに内心焦っていました。

大学へ進んだ同年代の友人と比べて「あと3年しか残されていない」と。将来どのような道に進むのか……。

そのとき思い浮かんだのは、子どもたちと嬉しそうに話す父の笑顔でした。子どもも好きだった父の嬉しそうな姿を思い出し、「子ども」というキーワードが思い浮かんだんです。「子どもと関わる仕事はどうだろうか?」と。
それが接客業だったとしても、お客さんとの距離感がぐっと近い仕事をしたいと望むようになりました。

——「次」の道が、少しずつ見えてきましたね。

坂口氏…いつまでも挫折している暇はなく、アルバイト情報誌を片っ端から読みあさっては、必死になって子どもを相手にする仕事を探していました。

ある日、浅草にあった『ウルトラマン倶楽部』という子ども向けのテーマパークの募集を見つけ、「これだ!」とすぐに応募しました。

『ウルトラマン倶楽部』は、「浅草ROX」という商業施設の中にあり、ジャングルジム、軽食、シヨップ、ショーが行われるステージなどがある、割合規模の大きな施設でした。

子ども好きだった父親の姿に影響を受け、子どもを相手にする仕事へ。アルバイト情報誌を片っ端から読みあさっては、必死に仕事を探していました



そこではシヨップコーナーを経て、子どもたちとより触れ合えるジャングルジムへと希望通り配属されました。

当時、ジャングルジム担当は女子だけという決まりでしたが、僕の熱意が伝わり、男子ではじめてのジャングルジムの担当になることができたんです。

3年という残された時間で、できるだけ多くの職業を経験したいと思っていたので、仕事は1年限りで辞める予定だったんです。でも、いろいろな仕事を任されるようになって、リーダーとしての役割も与えられて、気づけば2年が過ぎてしまいました。

——リミットは、あと1年……。

坂口氏…充実していましたし、周囲の人間関係もよく、辞める理由はなかったのですが、最後の1年間ということで焦っていました。

そんな焦りから「別の仕事も経験してみたい」と考え、退職することを店長に相談すると、「何も決めないで出て行くのは許さん。次に何をするのか、ここで少しでもヒントを見つけてから次に進め」と、厳しくも優しいアドバイスを受け、それを見つけるまで働くことになったんです。

僕はジャングルジムだけでなく、シヨップコーナーでも子どもたちと一緒に床を駆け回って遊んでしまうような店員で、レジが混んでいるのも忘れるくらい夢中になっていました。

子どもと一緒にいた母親からは「こんなに夢中で遊んでくれてありがとう」「保育園にもこんな男の先生がいたら」という声を、いただいたんです。

「そうか、保育園の先生になれば子どもたちと密に触れ合うことができる」

残り1年でようやく見えてきた将来の道。子どもの近くにいて、子どもと一緒に成長する「保育士」という存在を初めて意識し、その道に進むことを決めました。

入学するまでの1年間は、バイト先の店長のご厚意で塗り絵や手作り工作をする『ウルトラ教室』の先生として働きながら、学費を貯めて次の道に備える毎日。

そして同年代が大学を卒業する頃になって、ようやく保育学科のある短大に入学することができました。

子どもたちに教えてもらった 人を喜ばせる仕事に必要なたった1つのこと

——ようやく自分の道を歩めるように。

坂口氏…ところが、ここでもまた大きな挫折を味わうことになりました。

短大なので1年生の終わりには、附属の幼稚園での実習が始まります。たくさんいる園児たちの行動すべてを把握し、一人ひとりの体調の変化にも気を配りながらという現実さながらの実習は、脱落者が出るほど厳しいものでした。

僕はまわりの学生に比べて年上ということもあり、また熱意も人一倍あったはずでしたが、子どもたちに対する責任感、プレッシャーに立ち向かえるほどには成長できていなかったんです。

アルバイトでの実績もあったし、自分では適性があると思っていただけに、相当なショックでした。とはいえ、一度音楽で挫折しているので、もう別の道もつくれず、お先真っ暗で……。

この頃は悪いことが重なった時期で、通っていた運転免許の合宿では、運転してもダメ、ブレーキもダメ、坂道発進すらできない。

申し込んだのはマニュアルコースでしたが、教官に「今の僕には無理です。オートマ限定に切り替えてください」と半べソかいてお願いする始末でした（笑）。

この頃の僕は、常に泣きそうな顔をしていましたね。

ステージショーのアルバイトもうまく行かず、四面楚歌のような状態でした。

それまで僕は、何でも器用にできると思っていました。が、これ以上できないと思ったところまでやって、あとは逃げていただけなのではないかと考え、自信をな

くしました。

どれ一つ、最後までやりきっていなかった。自分なんかまだなにもしちゃいない……。

今までだったら、また体裁を繕って逃げていたかもしれません。けれど、「今置かれた状況の中で、できることをやり切ってみよう！」と、今度は逃げずに前に進むことを選ぶことができました。

ハードなことに変わりはありませんでしたが、毎日の気づきや成長記録をノートに記すようになり、「今日があつてよかった」と書いては、自分を励ます。

その繰り返しで、なんとか辞めずに、2年目を迎えることができました。



短大の幼稚園実習時代は、つぶれそうな毎日の中で「今日があつてよかった」とノートに記し、自分を鼓舞していました

——やりきると決めた2年目、状況はどのように変化したのでしょうか。

坂口氏…大きな変化があり、またそれによって子どもたちから、その後の道に進むための大切なことを教わりました。

2年目の実習は、工作などマニュアルのあるものばかりを実習科目に選んでいた1年目とは大きく変えて、せっかくなら自分の好きだった音楽を活かそうと、自分からお願いでギターを演奏したんです。

結果は大成功で、子どもたちもリズムに乗って一緒に楽しんでくれました。そして、子どもたちのキラキラした笑顔を見て、自分も笑顔になっていることに気づいたんです。「自分が楽しんでいないと意味がない」と。

それまでは、ツライ、苦しい、どうにかしてそこから逃げたいという心が、どこかで子どもたちにも伝わっていたんでしょう。「先生、楽しくないの？」と言われたこともありました。

子どもはちゃんとわかっているんですね。それからは、自分が楽しめることから始めようと思えるようになったんです。

女子高生の涙に促され、自分の声に従った 路上で生まれた「聞かせ屋。けいたろう」

坂口氏…子どもたちの笑顔から「自分が楽しむことの大切さ」を教えてもらい、それからようやく持ち直しました。

今までは、何かに失敗することが怖くておよび腰だったことも、「やりたいことはやり切る！」と心持ちもポジティブに。

ずっとやりたかったことの一つに、「絵本の読み聞かせ」がありました。恩師である佐藤先生という方が、学校で僕たち学生相手に絵本を読んでもくれる時間があったのですが、それがとても印象深かったんです。

僕だけでなく、皆その時間を楽しみにしていて、「絵本を大人に」というのはありだと、そして自分もいつかやってみようと、機会をうかがっていました。

ある日、古本屋でとても素敵な絵本に出会い、将来保育で役に立つかと思って買ったんです。

そして、その足でふらっと立ち寄った図書館で、さきほど買った絵本が「いい絵本100選」に入っていたのを目撃し、嬉しく思いました。

そのまま絵本のコーナーを見ると、佐藤先生が読んでくれた絵本がずらりと並んでいたんです。「これらの絵本なら、内容は知っている。昔でいうところの紙芝居屋さんのように、今晚、この絵本で読み聞かせ屋をやってみよう」と考えました。

——以前やっていた路上と、ずっとやりたかった絵本の読み聞かせが繋がりました。
坂口氏…路上で音楽をやっていた頃の経験から、人通りが多い場所は知っていたので、選んだ場所は北千住駅前にある店舗のシャッター前。

「音楽と違って、絵本の読み聞かせは珍しいから足を止めてくれるだろう」という密かな期待もあり、ぞろぞろと人が集まってくれることを期待しながら、本を並べていました。



夜の路上から始まった『聞かせ屋』。最初の頃は恥ずかしさで頭の中が真っ白になりました

人通りも多く、「読みは当たった！」と喜んだのも束の間、肝心の僕の読み書かせを聞いてくれる人は一人も現れず、通行人からは怪訝そうな目で見られたり、声をかけてくれる人も「(並べた本を見て)これ売っているの?」と勘違いされたりと、散々でした。

またしても予想外の結果でしたが、とにかく誰かひとりでも聞いてくれる人が現れるまでは帰らないと決め、ひとりで誰も相手のいない「読み聞かせ」を始めました。

恥ずかしさで頭の中が真っ白になっていたのも、どのくらいそこにいたのかわかりません。ずっとスルーされる中で、ふたりの足が僕の目の前に止まりました。

顔を見上げると、目の前にいたのは、子どもでも大人でもない、見た目がド派手なギャル風の女子高生。

「ねえ、なにやってんの？」と言われ、僕はしどろもどろに事情を説明しました。そのうち、「へー、じゃあ私たちに読んでみてよ」と、まさかの展開に。

「なんだ、つまんねーじゃん」なんて言われるんじゃないかと、内心不安でしたが断るわけにもいかず、恐る恐る読み始めました。

はじめてのお客さんを目の前に、一所懸命に心を込めて最後まで読み終えたのですが、彼女たちから返ってきたのは、意外にもまわりの足音をかき消すほどの大きな拍手でした。

それから求められるままに、2冊、3冊と読み進めていったのですが、そのふたりは飽きることなく「次、次」と頼んできたんです。

ひとりが「そろそろ行かなきゃいけないから、最後にこれ読んでよ」とリクエストしてきたのが、『かわいそうなぞう』（金の星社）でした。

悲しいお話なので、僕は読むことを躊躇していたのですが、その女子高生が小さい頃に読んでもらっていたものだということで、懐かしい絵本に再会してもらうのも聞かせ屋の仕事だと思い引き受けました。

戦時中における上野動物園の飼育員さんの葛藤、そして悲しい結末。

読み終えると、それまで聞こえていた拍手がなく、シーンとしていました。「やはり悲しい絵本を読むべきではなかったかな？」と思いつつながら2人の方に目をやると、2人はまさに涙ぐまぬように、溢れる涙をそっと拭いていたんです。

ピンと張った空気。人通りの多いその場所



「絵本の読み聞かせ」の最初のお客さんは、ギャル風女子高生の2人。恐る恐る『かわいそうなぞう』を読み終えると……

で、女子高生たちと僕の3人だけが別の世界にいるようでした。

その瞬間、僕は絵本の読み聞かせで気持ちが届いたことを実感しました。

「誰もやらないことを、自分がやろう」

ギターを絵本に持ち替え、昔ストリートでやっていた場所で絵本の読み聞かせが始まりました。2006年の10月14日の午後9時半。今から10年前のことです。

——いろいろな挫折を乗り越え、ようやく「聞かせ屋。けいたろう」が誕生しました。
坂口氏…まだ、乗り越えなければいけないことがありました。

実習も無事終わり公立の保育園の採用試験にも合格していたので、「その夜」までは、まわりはそのまま就職すると思っていました。当然です。

ところが突然、「保育園の先生ではなく、絵本の読み聞かせで生きていきたい」とまわりに話したので、皆は驚き、口を揃えて反対したり、道を見誤ろうとする僕を説得したりしてくれました。

「保育園に就職して、空いた時間に読み聞かせをすればいいじゃない」。その方が

「正しく」「楽」な道なのは、頭ではわかっている。けれど、心にひっかかるのはあの女子高生たちとの時間。

自分の迷いに決着をつけるため、あてもなくふらふらと向かったのは、『かわいそうなぞう』の舞台だった上野動物園。

動物に、「どうしたらいい?」なんて語りかけても、もちろん返事は返ってくるわけもなく、僕はまた、あのバイト先の店長に相談しました。

携帯から聞こえる店長の声は、なんだそんなことかと言わんばかりに明るく、「お前もう決まってるじゃん? やりたいことやれよ!」と、とてもシンプルな言葉が返ってきました。

そこで僕は一気に涙が溢れ、迷いは完全に消え去りました。本当は、この言葉が欲しかったのかもしれない。

「今日から動き出さないと」と、その足で上野動物園の投書箱に決意表明として、路上での読み聞かせのエピソードと、それをいつか聞いて欲しいと、お願いを出し

ました。

母親には、出勤前の慌ただしい時間に説得することに。
時間が足りなかったので、一緒に家を出て電車に乗り、職場の一步手前までずっと一緒に歩いていきながら事情を説明したら、最後に「もうわかったから、ついてこないで」と、なんとか納得してもらって（笑）。

こうして、後押しと理解を得て、最後に自分の声に従って、ようやく「聞かせ屋。けいたろう」はスタートすることができました。

「ゼロの距離」で触れ合える幸せをずっと大切にしたい

坂口氏…この10年間、いろいろなことがありました。今では全国を巡って読み聞かせ公演をしています。始めた頃は公演も、月に2回入っているかどうかで、仕事にならず不安だらけの毎日。

けれど、「やめよう」とは一度も思わなかったですね。不安になったときは、自分がステージにいて喜んでくれる人がいることを思い出すんです。

目の前の人が喜ぶ姿を見ることが、僕のエネルギー源。それが自分の喜びへと変わるとき、最高の幸せを感じます。僕の役割は、絵本を通して人をつなぐこと。親と子ども、先生と子どもたち、読み手と聞き手がつながるのは絵本の素晴らしいところで、他の読書では味わうことができません。

今まで、いろいろな寄り道をして失敗も挫折もしてきました。今もその途中だと思っています。

けれど、どれも「聞かせ屋。けいたろう」の活動につながる欠かせない道だったと、今では思います。

これからも絵本を広めるために、この道を進みます。

そして絵本を通して親や子どもたちと接しながら、今までと同じように「ゼロの距離」で、その素晴らしさを広めていきたいですね。